

## 「旅する平和の像」と日本政府の介入

梶村道子(ベルリン・女の会)

あいちトリエンナーレの「表現の不自由展・その後」が中止になった8月、「平和の碑」の姉妹像が、遠路ベルリンまでやってきました。女性芸術家団体GEDOKベルリン支部の作品展TOYS ARE US (玩具は私たち) に、作者のキム・ソギョン、キム・ウンソン夫妻が特別招待されたのです。

像は、ブロンズの「平和の碑」のメッセンジャーとしてソウル市内をバスで回ったエピソードを再現するため、「旅する平和の像」と題されてバスの座席に据えられました。「移動する像」というコンセプトの卓抜さが招待理由の一つでしたが、それだけではありません。A6版のカタログに寄せられた序文にあるとおり、「アジア太平洋戦争中、女性がいかに戦争遂行目的の玩弄物にされ、権力者の玩具としての役割を担わされたかを、この『慰安婦』像は明らかにしてくれる」からです。GEDOK理事のマイゼーアさんは、像は「もっとも胸をかき乱される」作品だと述べ、続いて「玩具は私たち、まさにそうよね？」と解説文を結んでいます。『慰安婦』=玩具=私たち、実に直裁な連帯の言葉です。「旅する平和の像」の名に違わず、像は日本軍「慰安婦」メモリアル・デーにはギャラリーを抜け出し、地下鉄を乗りつぎ、ブランデンブルク門前の私たちの集いに姿を見せました。

展示に先立って日本政府による妨害が懸念されました。像は5月にドイツ・プロテスタント教団主催の教会デーの一環としてボーフム市で展示されたのですが、その教会デーの会場管理者であるヴェストファーレン・リッペ地方連合会長を、デュッセルドルフ総領事が訪問し、「慰安婦」問題に関する日本政府の見解を伝えたと聞いていたからです。教会デーは終了し、像はすでに撤去されていましたが、総領事の口からは、「日本の植民地だった韓国は、『慰安婦』制度にも自ら加担した」、「日韓関係の悪化の責任は韓国内の急進派にあり、碑の制作者もその一人、像の展示は彼らへの肩入れだ」など、聞き捨てならない発言があったと聞きました。

そこで作品展の企画者バークさんが考えたのが、開催直前に日本大使館に招待状を送る策です。早速「我々の立場を記した情報を添付します。意見交換を望まれるならご連絡を」との返信とともに18頁のペーパーが届いたそうです。もっともこのペーパーは、「読まなかったわ。私たちは独立したNGO、どこからも圧力を受けるいわれはないし、それに芸術は自由ですからね」と、理事長のバルチュさんに一蹴されていました。ナチズム下での迫害の経験に基づ



8月14日、日本軍「慰安婦」メモリアルデーで。後方は各国の被害者の写真パネル。(撮影：梶村太郎)

き、ドイツ基本法第5条3項は、芸術・研究・教授は自由であると規定しています。結局8月下旬の最終日まで何事もなく、作品展は好評のうちに終わりました。しかしそれは、日本大使館が基本法第5条3項に配慮したからではなさそうです。

8月13日、名古屋での「表現の不自由展・その後」中止を受けて、ズュートドイチェ・ツァイトゥンク紙が「戦争犯罪 日本のリフレックス」という記事を掲載し、ドイツ各地の「平和の碑」設置の動きへの日本政府の介入と、困惑するドイツ側当事者の声を報じました。例えば、見学者センターに「平和の碑」のミニチュアを飾ったラーベンスブリュック強制収容所記念館。エッシェパツハ館長は、暫定展示でなければ問題はもっと広がっていたかもしれないとして、「小さな像があんな騒ぎになるとは」と呆れています。昨年、デュッセルドルフ総領事館の圧力の結果、展示を諦めたボンの女性博物館のピツェンさんは、「今でも不愉快」といっているそうです。事実をここまで公にされては、たぶん日本大使館も当面鳴りを潜めるしかないでしょう。



ボーフム市からドイツ鉄道の特急でベルリン中央駅に到着(撮影：筆者)

それにしても外務省の右傾化はエスカレート的一方です。昨年8月にデュッセルドルフ総領事館のウェブサイト匿名論文が載りました(現在は削除されています)。外交官が書いたとは信じ難い代物で、朝鮮併合は朝鮮半島の解放と進歩の契機、「慰安婦」が被った不正義はひとえに現代の韓国が担うものだと結論しています。ただ、これに憤慨したデュッセルドルフ大学の学生たちが、今年6月に自主講座を開いて『主戦場』を上映し、同論文を批判的に検証してくれたのは、嬉しいニュースでした。